

「種まき」の映画

「種まき」の映画  
「福多まき」の映画

「種まき」の映画  
高知上映実行委員会事務局長  
小松 茂弘

11月23日(月)、勤労感謝の日)高知市立自由民権記念館ホールで、ドキュメンタリー映画「種まきうさぎ」が上映されました。上映実行委員会によるもので、実行委員長は井垣政利さんでした。高退協や高教組のメンバーを始めとして、医療生協の池田さん、植田さん、草の家の太田さん、母連の畑山さん、県教組や退婦教のみなさんが上映実行委員として奮闘してくれました。

映画「種まきうさぎ」  
感想文より(抜粋)  
11/21(土)  
上映分

映画「種まきうさぎ」  
上映福多実行委員会

2011年3月11日三陸沿岸を襲った大震災と福島第一原発事故で放出された放射性物質による影響は甚大で、今なお10万人を超える人々が困難な避難生活を余儀なくされています。原発事故と核被災に立ち向かう若者の姿を通して、「フクシマ」とともに日本の新しい春を迎える青春像を描いた映画。ピギニ事件を追跡した「福多高校生ゼミナール」が福島の高校生を高知県に招いて交流し、立ち上がった福島の高校生、大学生、農業、漁業青年たちはその後、東京、埼玉、静岡、広島など全国各地の青年たちと交流を広げ、成長してきた記録も描かれています。この映画はフクシマと結び、自らの生き方を核被害のない平和な世界の実現に結ぶ若者たちの姿に、これからの日本と世界のあり方を見つめる作品でした。



上映の間には、映画化の企画者の一人で、福島県立高校教師の齊藤毅さんが、経過と高校生によせる思いを熱く語りました。鑑賞後の感想の中にも、「高校生の真摯な姿に感動した」「本当に原発を考えた」「フクシマを忘れないでいたい」など、一緒にがんばっていききたいと思いが多く寄せられました。

画の中で昔や今の元気な先生達が出ていてよかったです。天災やテロなど予測不能なことが起こる現実ですが、前を向いて目の前のことをひとつひとつ片付けていくこと、行動することが大事だなぁと感じたことでした。



● 私は昭和28年、初めて広島へ行きました。当時のドーム、市の現状を見ました。その後何回か行ってきました。今年の8月にも行ってきました。現在のドーム周辺は公園化していています。原発・核のおそろしさは忘れません。東北の事故後2回程行きましたが、原発・発電所の問題は早く解決しなければなりません。皆さんの力を結集して解決に向かいましょう・・・

● フクシマに向き合う青春、続編を望みます。

● 「過去の人のせいにするのではなく、未来を人に頼るな、自分で立てて歩め」まさにその通り、反省に根ざせば自らの歩む道は判る。木村さんの質素だけど、生きている自覚、「生きる」とは「の問いかけ」意味あり、経済、日常の動きを見つづも、自然の姿にそう自分を求めること。物事の判断基準にすること、選挙しかり、永続性ある姿を求めて生きて行きたいものである。復興の長さについての思いに、改めて、感じさせられる。



● 「思っていることを、声にして、言葉にしていくことが学び」「その仲間をつくっていく」ことが大事だと話す、大学生のかえでさんの言葉は、生き抜く力を多くの人と共有していくために、大人にこそ必要なものだと思えました。多くの人にこの映画を観てほしいし、何度でもまた観なければならぬと感じています。上映会を開いて下さって、ありがとうございます。

● 福島の女子学生の真っすぐな視線が印象的でした。映画の中で昔や今の元気な先生達が出ていてよかったです。天災やテロなど予測不能なことが起こる現実ですが、前を向いて目の前のことをひとつひとつ片付けていくこと、行動することが大事だなぁと感じたことでした。

うか。原発事故も忘れてはいないのですが、問題が大きくなり、重いので、ついつい目をそむけてしまっています。いけないことですね。若い人たちが頑張っている姿を見て、応援し続けなくてはと思っています。

● 福島の若い人達を中心に、なり、マーシャル、セミパラチンスク、日本がつながりませんでした。本当に嬉しく、頼もしく思っています。圧倒的な力に対して、あまりにも非力な私達ですが、若い人達の行動に希望を見出します。地球はつながっています。どんなに小さな動きでも、さざ波の様に人々の胸に届き、やがて大きなうねりになる事を信じ、私達大人もその輪の中に入りたいと思います。それにしても、福島の現状には心が痛みます。この放射能という得体の知れない怪物と、これからどの様に付き合っていくか、良いのか・・・この映画が少し、その答えを出してくれました。ありがとうございます。

高退協  
望年会・芸能祭から



左から「しばてん踊り井上さん」、「伴奏する柳井さん」、「顧問の岡崎さん」